

〔その時イエスはニコデモに言われた。〕「モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子も上げられねばならない。それは、信じる者が皆、人の子によって永遠の命を得るためである。その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。御子を信じる者は裁かれない。信じない者は既に裁かれている。神の独り子の名を信じていないからである。」-ヨハネ3章-

信じる

四つの福音書の中で、ヨハネだけが、ファリサイ派の著名な人物であるニコデモについて語っています。ニコデモは恐らく、夜の闇と沈黙を利用してイエスのもとに行った偉大なサンヘドリン（最高法院）の一員でした。光を求めていた彼は、イエスが光を与えてくれると信じていました。彼は夜に登場し、イエスとの会話をどのように終えたかについて福音記者が伝えることなく終わっています。

ニコデモの質問に答えて、イエスは出エジプトの間に起こった出来事を思い出すことによって神の救いを説明しました。噛まれた後、蛇に目を上げて命が助かった人の話です（民数記 21：4-9）。出エジプト中に実際に何が起こったのかを判断するのは難しい。しかし、イスラエル人は青銅の蛇を見たからではなく、神に心を向けたから癒されたのだと確信できます。青銅の蛇ではなく、救ったのは主でした。知恵の書は、「そのしるしを仰ぎ見た者は、目に映ったしるしによってではなく、万物の救い主であるあなたによって救われた。」（知恵 16：7）とコメントしています。イエスはこの事実に言及し、それを彼に起こることの象徴として解釈します。彼は十字架上に上げられ、彼を見るすべての人が命を救われると。

今日は四旬節の第4日曜日で、私たちは救いがどのようにもたらされたかのお祝いに近づいています。信仰をもってイエスを見上げるすべての人は救われ、「永遠のいのち」、決して奪われることのない命が与えられます。イエスは、神が御子を救いのためにつかわしたのであって、裁きや非難をするために送られたのではないと強調しています。実際、信仰によって自分のすべてを神の手に委ねた人は誰も非難されることはありません。そして、信仰の一步を踏み出すのに遅すぎるも決してありません。

この「信じる」ことは私たちの日常生活で何を意味するのか、理解することは非常に重要です。キリストを信じることは、単に私たちが信条を肯定すること、またはイエスが存在し、奇跡を起こし、死からよみがえったと信じることを意味するものではありません。これらの真理を受け入れることは重要ですが、これは上記の箇所を「信じる」という意味ではありません。実際、これらすべての事実を理論的に誠実に肯定し、それでも非常に利己的に生きることができます。ですから、「上げられた方」を信じることは、他の人との日々の関わりを通して、自分を差し出すことを生活の一部にすることに他なりません。それは、利他的に生きることを意味します。これこそが私たちに永遠の命をあたえる信仰です。

ヤコブの手紙の中で、聖ヤコブは私たちにこのことを非常に明確に語っています。「あなたがたのだけれかが、彼らに、「安心して行きなさい。温まりなさい。満腹するまで食べなさい。」と言うだけで、からだに必要な物を何一つ与えないなら、何の役に立つでしょう。信仰もこれと同じです。行ないが伴わないなら、信仰はそれだけでは死んだものです。」（ヤコブ 2：14-17）

ですから、私たちの信仰を実践に移すために、毎日の小さな自己犠牲から始めて、利己的でない生活を送りたいものです。